

## 日本のモダニズム建築を訪ねる

——知られざる名建築をもとめて——（全 10 回）

### 第 7 回 メンバースオンリーの「公」： 門司ゴルフ倶楽部クラブハウス

倉方俊輔（大阪市立大学大学院准教授）

#### ゴルフクラブハウスという建築類型

モダニズムのゴルフクラブハウスは、興味深い建築類型だと思う。

戦後を扱ったまとまった研究は確認できていないが、戦前期のゴルフクラブハウスについては水沼淑子氏が「日本におけるゴルフクラブハウス建築の歴史的研究」という研究をされている。ここには、日本におけるゴルフクラブが 1903 年の神戸ゴルフ倶楽部を嚆矢とし、初期のものは小規模の建物だったが、主に昭和期以降にはゴルフ人口の増加に伴って、建築家が本格的に設計に関わるようになり、計画理論の検討も進められたことが明瞭に書かれている。

昭和初期からエリート層のものとして広まり、そのイメージを残しながら高度成長期には大衆化する。このように大枠をまとめれば、ゴルフという存在が、いわゆるモダニズムの展開と時期を同じくしていることに気づく。高度成長期以降に最先端のテーマではなくなったことも一緒かもしれない。新しく、やがて懐かしき「昭和」なのである。

事実、モダニズム建築の歴史を紐解くと、意外にも多くのゴルフクラブハウスが顔を出す。今は写真でしか見ることはできないが、ル・コルビュジエ流のモダニズムに本格的に舵を切ったアントニン・レーモンドの《東京ゴルフクラブ》は 1932 年に完成したと思えない即物性に驚くし（竣工年は東京ゴルフクラブの立地が「朝霞」と改名される元となったゴルフ好きの名誉総裁・朝香宮鳩彦のアール・デコ邸宅《朝香宮邸（現東京都庭園美術館）》よりも早いのだ）、戦後の復興が本格化すると、谷口吉郎の《相模原ゴルフクラブ》（1955、現存せず）、佐藤武夫の《青梅ゴルフ倶楽部》（1958）、村野藤吾の《宝塚ゴルフ倶楽部》（1959）、吉村順三の《小倉カンツリー倶楽部》（1961）、天野太郎の《嵐山カントリークラブ》（1961）、丹下健三の《戸塚カントリー倶楽部》（1961、現存せず）など蒼々たるモダニズム建築家がゴルフクラブハウスを設計して、

自己の作風を刻み込んでいる。さらに磯崎新の《富士見カントリー倶楽部》(1974)などに対象を延長すれば、戦後初期のモダニズム、構造表現の展開からポストモダンまでの流れを、ゴルフクラブハウスという建築類型によって語れそうだ。

### アントニン・レーモンドによる作品

本稿で語りたいのは、福岡県北九州市門司区にある<sup>もじ</sup>門司ゴルフ倶楽部のクラブハウスだ。設計は前述したアントニン・レーモンド。1919年、帝国ホテル（現在、明治村に中央玄関部が移築保存されている）の設計を受けたフランク・ロイド・ライトにともなって来日し、やがてライトと別れてレーモンド建築事務所を開



門司ゴルフ倶楽部のクラブハウス外観

設した。東京女子大学の図書館（現本館、1931）や礼拝堂・講堂（1937）といった一連の建物、軽井沢の《聖パウロカトリック教会》（1935）などを設計すると共に、吉村順三や前川國男、ジョージ・ナカシマといった後年の著名デザイナーも所員に抱えて、戦後に続くモダニズムを育むことになった。太平洋戦争前後の一時期はアメリカに戻るが、1948年に再来日し、レーモンド事務所を再開する。《リーダーズ・ダイジェスト東京支社》（1951、現存せず）では、軽快な鉄筋コンクリート構造を新たな建築空間の質に結び付けて、戦勝国の建築家としての存在感を確固たるものにした。門司ゴルフ倶楽部のクラブハウスが竣工したのは、鉄筋コンクリート打ち放しの《聖アンセルモ教会》（1954）などを設計した後、戦後の代表作の一つである《群馬音楽センター》（1961）が完成する前年の1960年である。

### 名門の誇り

曲折したアプローチ道路を抜けると、クラブハウスはゆったりと建っている。大きな流れ屋根の架かる外観は、これ見よがしに豪華ではないし、奇をてらった感じもない。私たちは安心してエントランスに足を踏み入れることができる。

オーナーであればさらに心安らいで、わが家に戻ってきたように思うだろう。目の前に現れるのは、幅広い階段だ。この建物の特徴である挟梁で支えられた高い天井や、教会を思わせる円形のシャンデリアはすでにここから見えていて、上階がメインスペースであることを教える。階段の段板は打ち放しコンクリートだが、手すりは飾らない木製であって、コンクリートと木の取り合わせがこの建物の基本であることが分かる。素材の扱いの率直さと込められた意匠の気づかいが、相反するようにも思える二つの素材を取りなしていることにも気づく。

エントランス右手の受付に用を告げると「建築を見に来られる方にはお見せすることになっています」と丁寧な返事が返ってくる。名門ホールとしての誇りと、誇りに裏打ちされた優しさを感じる瞬間である。

拝見する我々もそうありがたい。いい建築は人をそうさせる力を持っていると、信じる。



エントランスの階段

### 受け継がれる居心地

小屋のようにシンプルで意を尽くした外観と同じように、クラブハウス全体の構成も明解だ。1階がロッカー室と事務室で、2階にワンルームの談話室兼食堂が広がる。2階の南側にはバルコニーが取り付いて、木造の庇で日差しを遮りながらコースの様子を臨むことができる。

驚くのは、完成から半世紀以上経った今も、建物の姿がほとんど変わらないことだ。外光を柔和に変えて内部空間に均質性を与える上部窓の障子も、軒の垂木と共に内外を一貫させる効果を発揮している木製のサッシも、フランク・ロイド・ライトからの継承性と異質



2階バルコニー



性が現れた大胆な中央暖炉の姿も、まるで竣工当時のモノクロ写真がカラーになったかのような。だからこそ、私たちは訪れて、この建物がともすれば写真でそう映るような和洋の奇妙な接合ではなく、空間に奉仕するものとして和洋を取り合わせていることを知ることができる。

もちろん、門司ゴルフ倶楽部クラブハウスは宗教施設でもなければ、公共施設でもない。営利施設であり、経済社会の中で舵取りを迫られる存在だ。時代の変化に合わせた変更もなされている。完成当時の平面図を見ると「婦人ロッカー室」が「ロッカー室」（女性の側にだけ接頭辞が付くところが「昭和」である）の44分の1のスペースしかない。隔世の感があるこの配置も、1965年と1980年の2回にわたって女性用スペースが拡張され、利用者層の変化に対応するものとなった。当初モザイクタイル張りだった1・2階の床は1975年にじゅうたん張りに変わった。当初取りそろえていたノエミ・レーモンドの家具の一部は失われるなど、意匠的な変化が無いわけではない。



2階メインスペース ワンルームの談話室兼食堂

それでも、この建築の居心地の良さは受け継がれている。ノエミ・レーモンドがデザインしたシャンデリアやバーカウンターの椅子は、今もそのままである。隅々まで行き届いた掃除は、木やコンクリートといった素材の風合いをい

っそう強調して、私たちが落ち着かせてくれる。メインの談話室兼食堂にエアコン設備は入っていない。だからこそ、木製サッシをはじめとする開口部は今も生きている。1984年に2階バルコニーの一部を特別室に改造して冷房を備え、プレー後に涼みたい時はそこを使うようになっている。何が快適というものであるか、大人は知っているのだ。人も建築も若いだけを取り柄ではないし、クレームに対応するだけがサービスではない。門司ゴルフ倶楽部クラブハウスを訪れて知るのは、ジェントルマンたちの見識の高さである。

### 北九州の繁栄

この場所に、戦前戦後を代表するモダニズム建築家の一人であるアントニン・レーモンドのゴルフクラブが建っているのには、ここ北九州の歴史的背景がある。

門司ゴルフ倶楽部は1934年にオープンした。戦前期の大陸進出に歩調を合わせて、北九州の門司港は国際貿易港として栄え、大連や青島や台湾からたくさん船が入ってくる。横浜、神戸のように門司にもゴルフ場がほしいという要望が貿易・海運業界などから高まり、地元財界が中心になって好適地を選び、ゴルフ場が設立された。資金集めに尽力し、自らも多額の出資を行ったのは、この地を発祥とする出光興産創業者・出光佐三であり、門司ゴルフ倶楽部の初代理事長を務めた。初代のゴルフクラブハウスは茅葺き丸太組で、この地の景観とも合うとして会員にも評判が良かったという。レーモンドが設計した2代目のクラブハウスが受け入れられる背景にも、こうした前史が影響していると考えられる。設計者としてレーモンドを推薦したのは、3代目理事長の安川寛だった。安川は当時、安川電機社長として《安川電機本社ビル》(1954)や《安川電機体育館》(1958、現存せず)を依頼し、そのつながりからレーモンドは《八幡製鉄健康保険組合記念体育館》(1955、現存せず)や《八幡製鉄レクリエーションセンター》(1958、現存せず)の設計も北九州で行っている。戦前・戦後を通じて、産業や貿易によっていわば中央に直接つながるこの地の性格が、レーモンドの起用にも反映しているのだ。

### モダニズムとゴルフクラブハウス

ゴルフクラブは会員の集いの場だから、新規顧客をそれほど積極的に開拓す

る必要は無い。だから建築に、流れゆくものより、留まるものを提供できる契機が与えられる。

単なるスポーツ施設ではない憩いをいかに生みだし、限られたメンバーが共有する家のような存在をつくるか。それが問われる。流行遅れだから、非経済的だから、といったスクラップアンドビルドの荒海に投げ出されるのとは違う。万人に開かれているのでない良さがある。

こうしてゴルフクラブという建築類型は、戦後モダニズム建築を良く表象すると同時に、その民主性にこそ価値があり、戦前性と断絶し、地域性を持たないという思い込みに対して違和感を突きつける。声高にではなく、あくまでジェントルに。

#### 参考文献

『50年 松ヶ江』（門司ゴルフ倶楽部、1985）

安川寛聞書、島村史孝著『道草人生』（西日本新聞社、1989）

稲月篤「北九州市から見た門司ゴルフ倶楽部ハウスの位置づけ」（西日本工業大学倉方研究室卒業論文、2011）